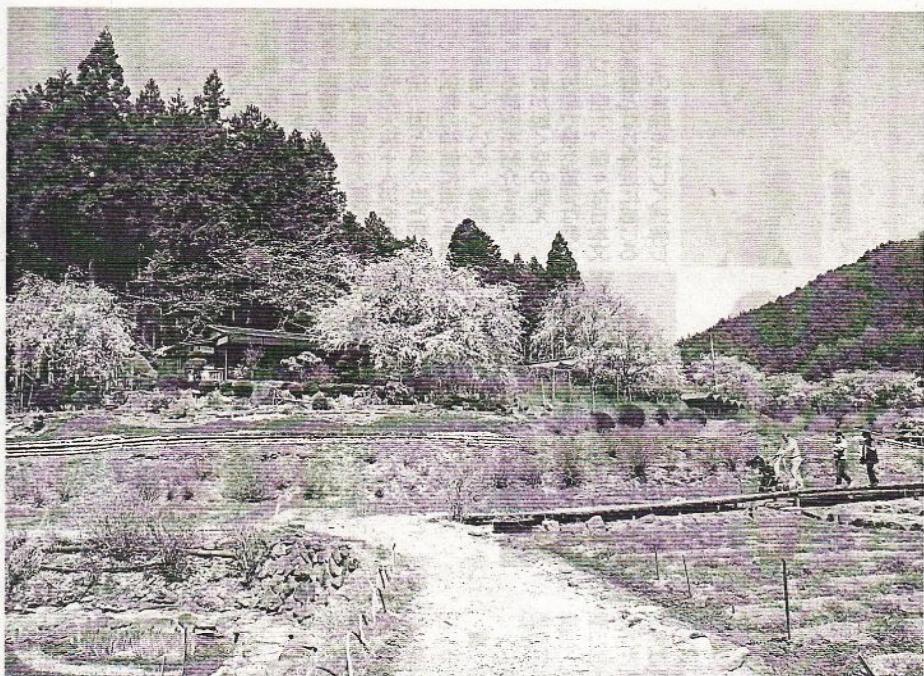
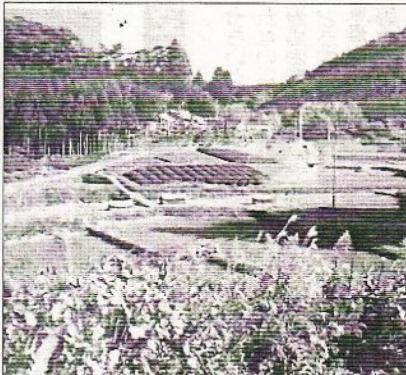


絵になる風景「開拓」



色とりどりの花が咲き、ゆったりした時間が流れる滝谷花しょうぶ園。6月上旬には花ショウブが咲き始める



30年ほど前の滝谷地区。左上の林は休憩所に、中央部は花ショウブ園の中心になっている=いずれも宇陀市室生滝谷



花しょうぶ園は、1988年6月、3haに300種250万本の花ショウブを自玉にオーブンした。起伏に富む谷間の地形を巧みに生かし、低地には色とりどりの花ショウブ、丘には花の群落を一望できる東屋を配した。花を間に楽しむ

木製の周遊路も作った。看板の花ショウブはいま、600種100万本が訪れた人たちの目を楽しませた。

「こんななんびり気分を味わうのは久しぶり。ショウブが満開の頃、もう一度来たい」。三重県四日市市の会社員(62)は笑顔を見せた。孫娘ら4人で、ゆっくり流れる時間を味わった。

2度目の来園という妻(59)は「前は芝桜を見に来たが終わっていた。でもフジがきれいだった」。花の手入れは休みなし。

「口に出せない苦労の連続だったと思います。自分のおやじながら、よくやつたと頭が下がります」。花しょうぶ園を経営する有限会社の常務曰下志拓也さん(44)は父・勤さんを思い、感慨深げだ。

勤さんは、花しょうぶ園がやって来る。(喜田洋)

ピンク、紫、白、黄色、そして山の緑に青い空。この季節、宇陀市室生滝谷の「花の郷 滝谷花しょうぶ園」は彩りにあふれ、にぎやかだ。絵どころがなくとも絵筆を握りたくなる。だがかつて、一帯は雑草が茂り、稻の切り株が目立つ休耕田だったことを知る人は少ない。豊かな自然に触れ、遊び、味わう。そんな人たちの笑顔の陰に汗でつづられた「開拓史」がある。



地区で何度も話し合った。2年後の1988年12月、賛同した12戸が土地と出資金を出し合い、農事組合法人を設立、花しょうぶ園が産声を上げた。

事務所に10冊ほどのアルバムが残る。茶色い休耕田、山を削っての道づくりやブルドーザーでの整地作業。あぜ道に座り、休息する主婦らの笑顔もある。色あせた写真の一枚一枚が、開園までの長い道筋を物語る。花の手入れは休みなし。

だ。倉田政紀さん(63)は「手入れは農作業と一緒に花ショウブも3年に一度は入れ替えないといい花にならない」と作業の手を休め、話した。桜やモクレン、レンギョウなどに繞き芝桜、チツセイが見ごろを迎える。そして主役・花ショウブの出番がやって来る。(喜田洋)